

全学情報リテラシー演習科目授業改善効果と課題分析の試み

阿部 一晴*1・酒井 浩二*1・研 良平*2
Email: i_abe@koka.ac.jp

*1: 京都光華女子大学 キャリア形成学部 キャリア形成学科

*2: 株式会社ワークアカデミー

◎Key Words 情報リテラシー, 情報活用力, アセスメント

1. はじめに

社会の情報化がますます高度に進む中、情報を様々な場面で利活用する能力（いわゆる情報リテラシー）は、すべての社会人に求められている。このため大学教育においても、これに応じた能力の養成が必要とされている。こういったことに対応するために、本学では、1年次生対象の基礎・教養科目として情報リテラシー演習科目を提供している。社会から大学での育成を期待される情報リテラシーの内容も、情報処理スキルに留まらず、より実践的な情報を活用する能力に大きくシフトしてきている。一方、最近の入学生はいわゆる「スマホ世代」であり、スマホによる情報検索やコミュニケーションには長けているものの、PCの操作経験が少なかったり、苦手であったりする学生も増えている。本学においても、情報活用力修得を重視しつつPC操作スキル修得とのバランスを意識した授業内容に変更し、毎年改善を繰り返している。従来とは異なる授業運営に取り組んで5年が経過した。本稿では、この間の全学情報リテラシー科目授業改善の取り組みとその成果や課題等を、成績や出席状況等に加え、受講生アンケート、自己評価等を組み合わせ多角的に分析する試みについて報告する。この結果を今後の更なる授業改善に繋げていきたい。

2. 情報リテラシー演習科目の概要

学生の入学時点でのパソコンや情報に関する知識・興味や技術の個人差は大きく、またすべての学生が社会で求められる情報を実践的に利活用する能力の基礎を修得している訳ではない。このため、情報リテラシー科目の授業内容として、学生全体の知識・技術を底上げし、ある程度統一するために、前期「ICT演習Ⅰ」でPC操作、タイピングとWord, Excel, PowerPointの基本操作を修得する内容としている。入学時点での学生にレベルの違いがあることから、同一時間割に必ず複数クラスを開講し、内容を初級（基礎的な内容を確実に修得する）と中級（基礎的な内容で退屈しない様に少し高度な内容まで扱う）のクラス分けをおこなう。後期「ICT演習Ⅱ」では、前期に学んだことを基本に、「情報活用力」を段階的に修得する内容としている。

授業内容として、1年次終了時まで、この情報活用力をしっかりと身につけさせ、2年次以降の授業を通じて、これらを実践できるようになることを強く意識している。

3. 授業方法の改善

前述のとおり、「ICT演習」の授業内容等の改善を進めてきたが、同時に授業方法も大きく見直すこととした。

複数クラスを同時開講する必要があるこの科目は、従来から形式的には統一的な授業運営を目指していたものの、実際には多くの非常勤講師に頼らざるを得ず、日々の授業進行等は各担当教員の裁量に任されており、厳密な意味での統一した授業運営にはなっていないのが実状であった。全学統一の教育内容を責任持って提供するという視点で授業方法についても検討し、専門の教育事業者に授業運営を委託することとした。ただし、委託といってもいわゆる「丸投げ」ではなく、授業計画や授業運営の主体、最終成績評価の責任を専任教員がコーディネータとして担い、その指示のもと専門業者と文字どおり連携して進めるという体制を構築した。

授業には、経験豊富なメイン講師と各クラスに必ずサブ講師が入り2名体制でおこなうことを基本としている。週一回の授業のみではなく、eラーニング教材等を活用して、授業外学習をおこなわせる仕組みも確立している。また、同時開講のクラスを除き、出来るだけ同一講師が複数クラスを担当することを意識した時間割・授業担当の配置をしている。毎回授業後に担当講師の定例ミーティングを開催し、クラス間で差異が出ないように常に調整をおこなう。これらは、これまでの非常勤講師中心の授業運営の問題点を解決、改善するものである。

4. 5年間の授業取り組みの概要

これまで述べたとおり、従来とは大幅に見直した「ICT演習」授業を5年間にわたり実施してきた。ここでは、この間の授業の取り組みについて、いくつかの推移や変化について見ていく。

図1は受講者数の推移である。一部の学科を除き、ほぼ全学での必修科目となっている前期「ICT演習Ⅰ」は、入学者の増加に伴い、2015年度に374名だった受講者数は、2016年度から2018年度にかけては460～470名の受講者数で推移している。後期「ICT演習Ⅱ」もほぼ同様で、2015年度363名だった受講者は2018年度で418名と増加している。

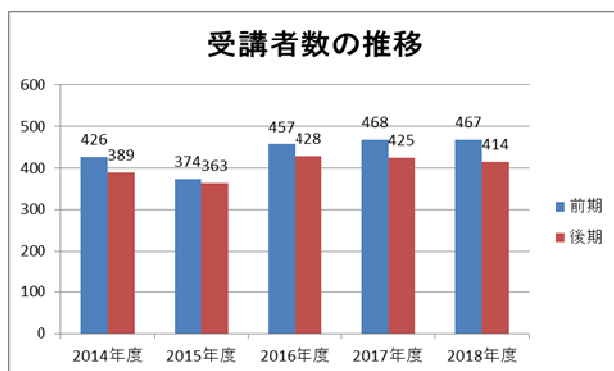


図1 過去5カ年の受講者数推移 (ICT 演習 I・II)

図2は前期から後期への受講継続率の推移である。本来は、前期「ICT 演習 I」と後期「ICT 演習 II」はセットで受講することを前提としたカリキュラム内容になっているが、セメスター制という形式上、履修登録や成績評価の取り扱いとしては独立した科目である。このため、前期のみ受講し後期を放棄してしまう学生が少なからず見受けられる様になった。(この2科目が必修となっている学科では、いずれ再履修しなければならない) 前期受講生の内、後期も続けて受講する割合としては、2015年度の97.1%をピークに年々低下している。2018年度には90%を割り込み、88.7%まで低下しており、少し気になる傾向を示している。

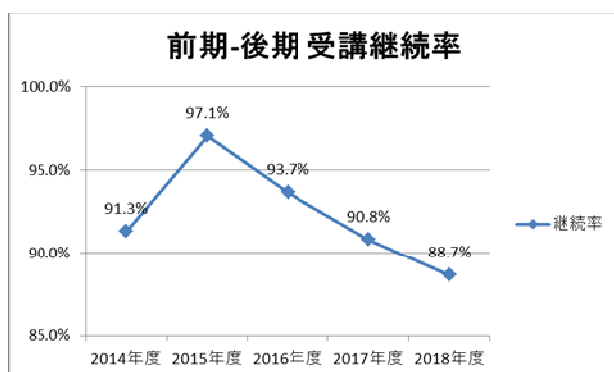


図2 過去5カ年の受講継続率推移

図3は出席率の推移である。出席率については、2017年度までは各年で上下しながら緩やかに上昇していく傾向であった。しかし、2018年度は、前期が約2%の低下を示し、後期が0.1%の上昇となっている。全体的に、後期の方が前期より出席状況が少し悪くなっている。

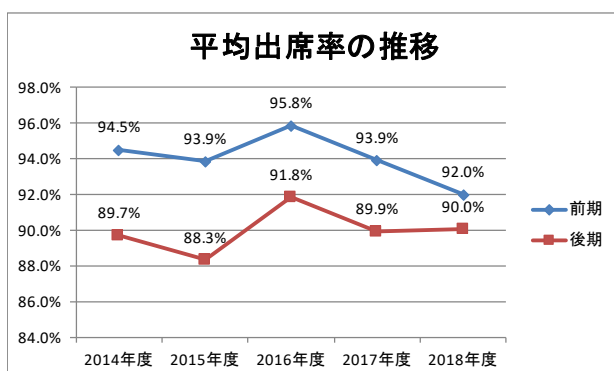


図3 過去5カ年の出席率推移

この様に、多少の変化はあるものの、全体的には他の科目に比べても出席率の高い結果となっている。

次に最終成績の推移である。図4は前期「ICT 演習 I」・後期「ICT 演習 II」の最終成績評価(素点)の推移である。

前期は、2014年度から一貫して81点前後で安定している。後期は、2014-2015年度に75点前後だった成績が、近年は80点弱まで上昇している。前期と後期の成績の傾向に大きな違いが見られる。特に、後期の成績が年によって変動している。

なお、前期「ICT 演習 I」、後期「ICT 演習 II」ともこの間の評価基準はほぼ一定であり、大きく変化はしておらず、成績の変化は受講生の習熟度、目標到達度の変化を示していると考えている。

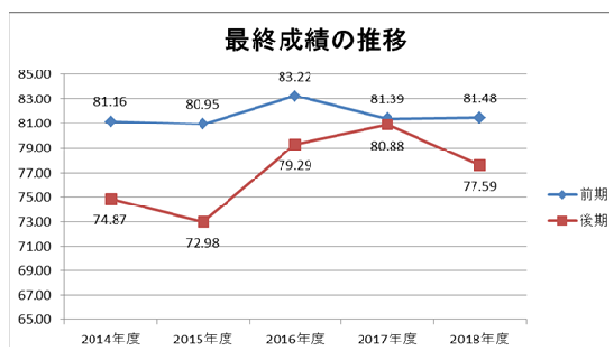


図4 過去5カ年の最終成績評価(素点)推移

図5は前期「ICT 演習 I」・後期「ICT 演習 II」の単位不認定率(全受講者中「不可」評価の比率)の推移である。2014年度は前期6%、後期9%程度あった不認定率は、年々低下しておりこの2年ほどはいずれも5%前後で安定するようになりつつある。前述のとおり、評価基準はほぼ一定であり、大きく変化はしていない。ただし、最終成績(素点の平均)と単位不認定率の推移は異なる傾向にある。

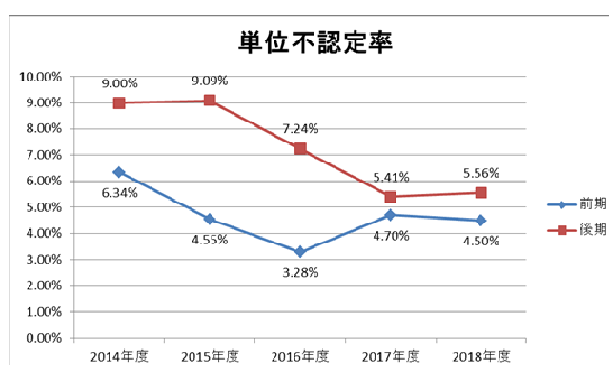


図5 過去5カ年の単位不認定率推移

5. 授業評価アンケートの結果

本学では、基本的に全科目対象に前期・後期ともに授業回数が3分の2程度進行した時点で「学生による授業評価」をWeb・スマホを用いて実施している。ICT 演習では、前期・後期ともこれとは別に詳細の授業に対するアンケートを期の中間と期末の2回実施している。図6・図7が前期・後期それぞれのアンケート

項目に重みづけを行い、10点満点指標に換算の上、比較したものである。

前期アンケート

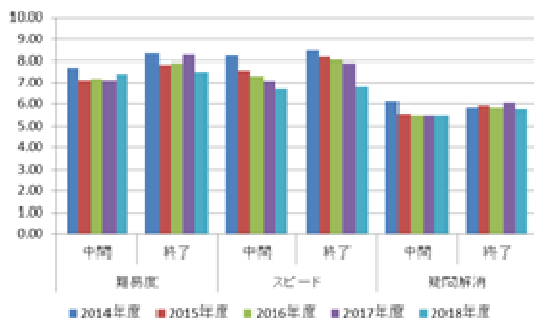


図6 過去5カ年のアンケート結果（前期）

後期アンケート

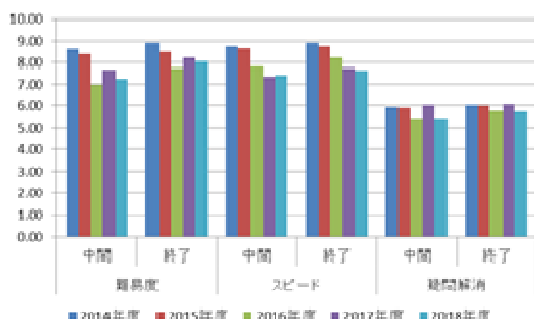


図7 過去5カ年のアンケート結果（後期）

前期・後期ともに、授業半ばの中間アンケートよりも期末アンケートの方の評価が若干高くなっている。ただし、総合的に見て学生からの評価が全体として年々低下している傾向が読み取れる。これは、成績をはじめとする他の指標と異なる傾向を示している。

前期について、授業の難易度に関する評価は、10点中7～8点台でほぼ一定して推移している。授業の進行スピードについての評価は、年々低下している。授業を通じて疑問が解消できたかについては、他2項目と比べて低い水準ではあるが5～6点台で固定して推移している。

後期では、難易度に対する評価は、全体的に緩やかな低下傾向であったが、2016年度以降は低下が緩やかになっている。進行スピードに対する評価については、前期同様全体的に低下傾向にある。疑問解消についても、前期同様に5～6点台でほぼ一定に推移している。

6. 成績との関連での授業評価アンケート考察

前述の受講生による授業評価アンケート結果について、複数の観点から考察をおこなった。

まずは、成績との関連で見ていきたい。本学ではGPA制度を導入しており各科目の成績は秀、優、良、可、不可の5段階評価（成績入力100点満点の素点）となっている。

図8は前期「ICT演習Ⅰ」、図9は後期「ICT演習Ⅱ」それぞれの過去5年間の成績分布（秀、優、良、可評価に当たる部分はそれぞれ10点きざみ、不可評価につ

いては60点未満、30点未満に2分割）を比較したものである。

前期階級別構成比

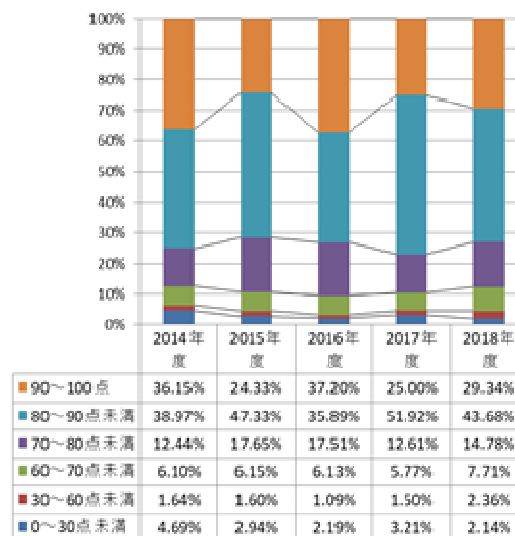


図8 過去5カ年の成績分布比較（前期）

後期層別構成比

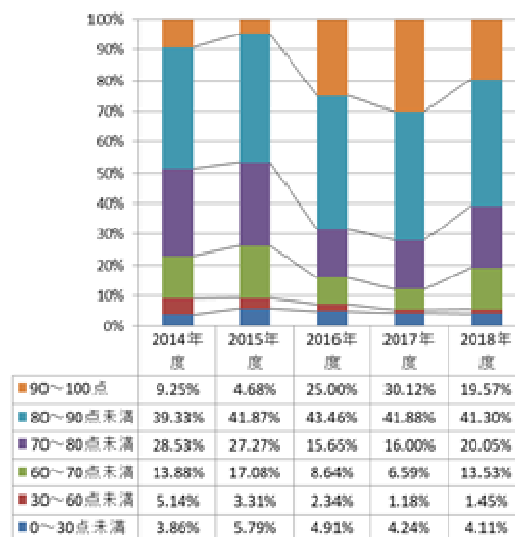


図9 過去5カ年の成績分布比較（後期）

前期は、秀・優評価にあたる80～100点の層の全体での比率が、あまり変化なくほぼ一定である（秀と優の評価比率は年度によってばらつきがある）ことがわかる。可評価にあたる60～70点未満の層にはあまり変動がない。また、不可評価（単位不認定）にあたる60点未満の層も一定の変動範囲に収まっている。良評価にあたる70～80点未満の分布が各年度によってばらつきが出ており、成績中間層が年度によって増減している様子が窺える。

後期は、2015年度までと2016年以降で大きく傾向が異なっている。優評価にあたる80～90点未満の層がいずれの年度も最も多くなっているが、2015年度以前は優評価にあたる70～80点の層が2番目に多いのに対し、2016年度以降は秀評価にあたる90～100点の層が2番

目に多くなっている。また、不可評価にあたる60点未満の層では、0～30点未満はほぼ同じ比率で推移しているが、この層は徐々に減少し、2017年度以降は全体の1.5%以下になっている。

以上から、全体的に好成績を収める受講生が増加している傾向にあり、受講後の到達段階も高いものになっていると推測される。前述したアンケート結果と照らし合わせると、授業そのもののレベルや質が向上したことにより、授業担当教員側が気づかないうちに高いレベルの内容や速いスピードでの授業進行となっている可能性が示唆される。しかしながら、成績の推移や構成比をみる限り、授業が「難しい（あるいは優しすぎる）」「速い（あるいは遅すぎる）」と評価しながらも、受講生は積極的に学習に取り組み、着実に成果を上げている様子も同時に窺える。

また、単位不認定の層は、ギリギリあと一步で合格ということではなく、全体的に成績評価がかなり低い水準に留まっている。最終成績が0～30点未満の評価となる受講生は、授業に出席していなかったり、課題をほとんどもしくはまったく提出していなかったりなど、そもそも授業に参加していない層であると考えられることから、後期では30～60点の層が減少し1.5%以下になっていることは、授業に参加するほぼすべての学生が一定の水準まで、主体的に学習を進めてきた結果であると考えられる。

7. 情報活用スキル自己評価結果の考察

2015年以降の後期授業では、情報活用スキルとして「主体的な思考」「情報収集・分析」「レポート作成」「プレゼンテーション」についても習得に関する自己評価を回答させている。図10がその結果である。

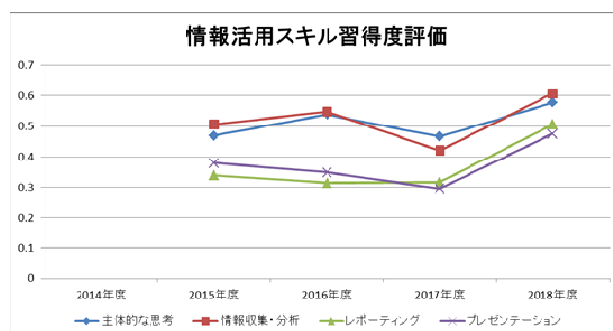


図10 情報活用スキル習熟度自己評価

全体的に2015～2017年度にかけて緩やかに低下していたが、2018年度は大きく上昇している。後期の授業目標の達成度という観点からは、大きな成果であると言える。2018年度後期授業では成績等とは別に、学生の自己効力感を高める方向に、授業がうまく機能したと考えられる。こういった点も授業内容・方法の改善結果評価の観点として捉えていきたい。

8. まとめ

以上述べたとおり、本学において全学共通教育として提供している情報リテラシー科目の授業内容・授業方法の見直しをおこなった。これらを通じて、「非常勤

講師中心の授業担当によるクラス間のばらつき」「授業内容が社会の求める情報リテラシーの水準に適合できていない」といったこれまでの課題についてはかなり改善できたと評価しているが、今後も継続的な見直しの取り組みが必要であると考えている。

授業評価アンケート結果から、この授業について受講者側の視点から再評価することで、成績や出席状況などとは異なる見え方を確認することができた。

この授業においては、年々改善を重ねより効果的な知識・スキルの習得を目指させることに取り組んでいる。その一方で、それらの改善に伴い、授業の難易度や進行スピードがすべての受講生にとって適切なものであるとは感じられない様に受け取られ方が変化しているということには留意すべきと考えている。しかしその一方で、授業内である程度疑問が解消できていると感じている受講生が一定数以上あり、また成績や個別の学習項目における習得状況の学生評価として概ね高い水準にあることに加え、全体的にはゆるやかに上昇傾向を示していることから、これまでの授業内容・方法の改善には一定の評価を与える結果ともなっている。

また細かく分析してみると、5年間の取り組みの最終年度にあたる2018年度の前期授業では例年とは少し傾向が異なり、出席率の低下や成績の低迷が見られる。当該年度は例年より新入学生をやや多く受け入れており、その結果これらの授業の受講生も増えている。このことによる影響としての一過性のものであるのかどうかは更に詳細の分析が必要であると思われる。一方、後期授業においては、僅かながら成績および出席率が向上に推移しており、学生の学習項目の習得における自己評価が高いという結果を示している。本科目における学習項目のほとんどは、今後の学習活動等において必要なものであり、それらに対する自己効力感を高めることができたのは、今後の学びにおいて、プラスに働くと考えられる。

前期から後期への受講継続率は、2018年度はこれまでで最も低く、90%を割り込んでいる。このことの原因分析も必要であると思われる。前期授業の改善においては、後期授業も同時に分析しその要素を前期授業内に組み込み、後期授業の受講率を高めるための工夫を取り入れることで、より効果的な情報リテラシー教育の体制が実現できると考えている。

本学では、2019年度から基礎・教養カリキュラムの大幅な見直しを実施し、情報リテラシー科目もその対象となっている。これまでの取り組み結果を更に分析・評価し、今後も改善を続けていきたい。

参考文献

- (1) 阿部一晴, 酒井浩二, 中健太: “全学情報リテラシー演習科目授業改善の取り組みと成果”, コンピュータ利用教育学会 2018 PC Conference 論文集, pp.159-162 (2018).
- (2) 阿部一晴, 酒井浩二: “全学情報リテラシー科目における情報活用力可視化の試み”, コンピュータ利用教育学会 2016 PC Conference 論文集, pp.205-208 (2016).
- (3) 阿部一晴, 酒井浩二: “情報活用力向上を目的とした全学共通教育の取組み”, 情報コミュニケーション学会 研究報告, vol.12, no.2, pp.19-22 (2015).